

Hello & Touch

ユメミル、チカラ 応援レポート

地域メディア活動報告書

2019





編集方針

未来に、Hello&Touch

「私たちは、夢見る力を応援する広場です」

HTBは、この企業理念を掲げ、
北海道の未来に貢献するために、
発見と感動を発信し続けてきました。

2018年、HTBは開局50年を迎え、
札幌市中央区へ本社を移転しました。
地域メディアとしての原点に立ち返りながら、
総合映像メディアとして、より高いレベルのクリエイティブと、
豊かなコミュニケーションを生み出す。
それが、私たちのこれからのミッションと考えています。

思いは変わらず、目線は前に。
北海道の素晴らしい未来を夢見て
地域の皆さまと共に取り組んできた
HTBの「ひろばづくり」を、ここにご報告いたします。



CONTENTS

特集1

そのときに、そのあとに——

北海道胆振東部地震 P1

特集2

50周年記念事業

50年目のありがとう P6

地域メディア活動報告

Hello&Touch 2018-2019 P10

Stakeholder Dialogue

これからの地域メディアとは。
これからの「ひろばづくり」とは。 P16

365日、ずっとHello&Touch!

社員は語る P20

ミンナと、ユメミル P22

ユメミル、チカラ応援レポートを読んで

第三者意見 P24

地域メディア活動報告書「ユメミル、チカラ応援レポート」は、HTBの社会的責任を明らかにし、その実現に向けた活動を報告する冊子です。
本号では2018年度(2018年4月～2019年3月)を中心に、私たちの日々の取り組みをお伝えします。

特集1

そのときに、そのあとに—

北海道 胆振東部地震

2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震。

北海道初となる震度7の大地震は、大規模な土砂崩れや液状化、地割れなど道内各地で甚大な被害をもたらしました。

HTBも、開局以来初の本社被災を経験しました。

国内初となるブラックアウト(道内全域の295万世帯が停電)により商用電源を喪失し、一時停波したほか、携帯電話の基地局も被災したため復旧まで約60時間、本社と現場との連絡が寸断される事態も起こりました。

このように、「地域の生活者にあまねく放送を伝える」という

基幹メディアとしての機能が揺らぐ事態に見舞われながらも、

HTBでは全社を挙げ、放送を継続するための緊急態勢を展開。

放送以外の手段も使った情報発信を続けました。

大規模な自然災害時に正確な情報を迅速に伝えることは、地域ジャーナリズムの使命です。

地域の生活者の生命と安全を守るために動いた発災直後、

そして、その後も継続して行ってきた支援活動の一部をご報告します。

2018.9.6

発災直後

緊急時、情報は適切に行動するための判断材料となります。

今、北海道の人々が求めている情報を届ける。地域メディアとしての使命を遂行するために動きました。

今、どこで、何が起きているか いち早く被災状況をレポート

最大震度7を観測した厚真町では、吉野地区・桜丘地区など東部丘陵地で大規模な斜面崩落が発生し、多くの住宅が巻き込まれ36名が犠牲となりました。HTBには2000年の有珠山噴火以来18年ぶりとなるANN取材本部が設置され、テレビ朝日系列11局から一日最大で53名のENGクルー、記者、応援ヘリコプターが現地入りし、レポートを送り続けました。地震直後の午前4時55分から当日の『イチオン!』終了まで断続的に報道特別番組を緊急編成して被災地の状況を伝えました。



厚真町に出動したM30衛星中継車。携帯基地局も倒壊したためVPT無線機も不通となりました。本社から高利得アンテナを持ち込み電動ポールに取り付けて、本社との無線連絡を確保しました。

報道部から

喜多和也



最も多くの犠牲者が出た吉野地区では何軒もの家が土砂にのみ込まれていました。救助隊の捜索活動を見つめる親族の方々の姿に心が痛み、甚大な被害を伝えなければという思いで、余震が続く中、取材活動を行いました。一方で、「被災者のための報道の在り方」を考えさせられました。あの日の体験を忘れず、今も被災地を取材し続けています。



より多くの人に情報を届けるため SNSやインターネットメディアを活用

エリア全域停電で、各家庭で地上テレビ放送を見られない状況が続いたため、HTBの公式WEBサイト・YouTube・ニコニコ生放送で放送内容を同時配信しました。また、放送とは別プログラムでインターネット向けにスタジオを開設。ライブライン情報を中心に伝えました。AbemaTV newsでもHTBの報道特別番組のリニア配信を行い、さらに緊急チャンネルを設け、L字送上の文字情報を2日間にわたって配信しました。

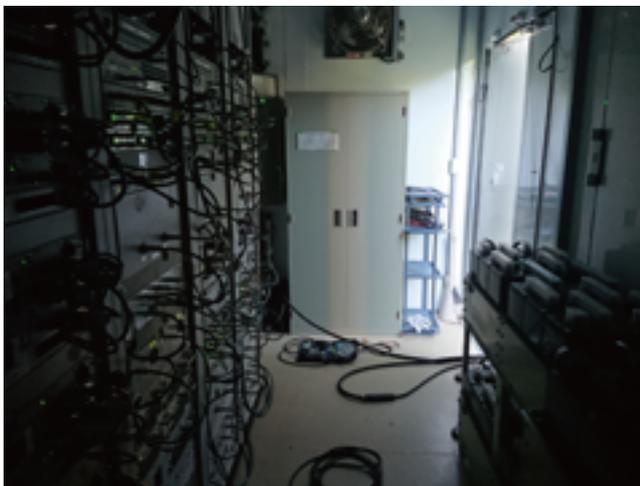
今回の地震では、SNS上でフェイクニュースが飛び交いました。これからの災害報道の在り方を考えるとともに、自社のSNSアカウントを使って信頼できる情報を迅速かつ積極的に発信することの重要性を再認識しました。





マスター復旧と ネットワーク保守に全力を尽くす

地震は、2018年9月17日の本社移転に伴う新マスターへの切り替えに向けた最終点検作業中に発生しました。停電時に自動起動する非常用発電機が立ち上がらず、UPS(短時間の電源を確保



ポータブル発電機からのケーブルを局舎設備に接続。換気扇がストップし、灼熱の送信所建屋での作業を続けました。遠方に車を走らせ、20ℓの携行缶を持って長い行列に並び、燃料のガソリンを確保しました。

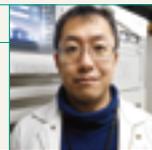


保するためのバッテリー)による放送を行いながら非常用発電機の復旧を急ぎました。しかし、復旧直前にUPSのバッテリーが尽き、マスターの電源喪失という未曾有の事態となり、夜を徹しての復旧作業を行いました。

さらに、道内各地に放送波を届ける拠点となる送信所の電源バックアップも急務でした。NHKを含めた道内テレビ局、保守会社、自治体が協力し、手分けして各送信所に可搬型発電機を持ち込んでバックアップする緊急対応を行いました。

技術部から

岡田 壮弘



関連各所が協力し、非常用発電機のない送信所へのバックアップを行いました。HTBは道北エリアと札幌市内、合わせて3送信所を担当。街灯も信号機も消えた真っ暗な道路を走りました。途中、携帯も不通となり、状況確認は困難を極めました。が、「電波を止めるな」という強い思いと使命感の下、放送に関わる技術者が力を合わせて乗り切りました。

テレビを社屋前に設置 携帯充電コーナーも開設

停電は順次解消していきましたが、そのタイミングには地域差があり、地域によっては情報を得られない状況が続きました。そこで、地震の翌日に本社(豊平区平岸旧本社)の玄関前にテレビを設置するとともに、携帯用の簡易充電コーナーを設けて、地域の人々にご利用いただきました。



最大80口の携帯充電コーナーを用意しました。

2018.10.6

報道特別番組

『激震～あの日から1カ月～』放送

地震発生から1カ月後に報道特別番組『激震～あの日から1カ月～』を制作・放送しました。地震で亡くなった方々の人柄や遺族の思い、「前を向いて生きるしかない」と懸命に日常生活を取り戻そうとする被災者や行政の動きを、現地からの生中継で伝えました。



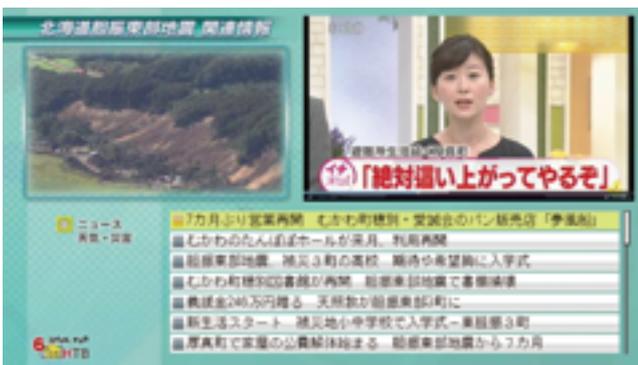
番組のテーマは「命」。宮坂尚市朗厚真町長は「亡くなられた方々の人生や生き様を引き継いで、試練を乗り越えて一日も早い復興を成し遂げたい」と決意を語りました。

2018.11.5

データ放送

「北海道胆振東部地震関連情報」配信

苫小牧民放など地元紙の協力を得て、被害の大きかった厚真町、安平町、むかわ町などの最新情報を伝え続けています。この情報はテレビ朝日、朝日放送テレビ、名古屋テレビ、新潟テレビ21のデータ放送(通信コンテンツ)としても配信されており、道外に住む北海道出身の方々への情報提供にもなっています。



アナログデータ放送時代から継続している、道内地方紙との連携を活かした配信です。

2018.10.27

『LOVE HOKKAIDO』で

海外へ向け元気な北海道を発信

地震は海外からの旅行者に不安をもたらし、観光シーズンの北海道に大きな打撃を与えました。海外向け北海道情報番組『LOVE HOKKAIDO』の出演者らは、地震直後から自発的に番組公式のFacebookやweiboで、「北海道の今」を伝えました。また、宿泊キャンセルが相次いだ観光地の窮状を知り、特別番組『元気です!北海道スペシャル』を制作・放送しました。



番組出演者はSNSで外国人観光客に向け電気や交通網の復旧状況、相談窓口情報などを伝え、来道予定者の質問にも答えました。特別番組は、10月27日に放送しました。

2018.11.10

キャンペーン「食のチカラ」で

「食べて応援!胆振のお米」放送

「食のチカラ」は、2009年にスタートした北海道の食や生産者を応援するロングランキャンペーンです。朝の情報番組『イチモニ!』(月～金曜6:00-8:00、土曜6:30-8:00)では、胆振地方で一番の収穫量を誇る米どころである厚真町の若手生産者がつくるブランド米を紹介し、「お米を食べて厚真町を応援しよう」と呼びかけました。



自然の猛威に負けず、米づくりに情熱を燃やす生産者の言葉を視聴者に届けました。

現在まで

地域の復興や頑張りを可視化し、国内外に発信し続ける。それこそが、真に、地域に寄り添うということだと考えました。私たちはこれからも、被害の大きかった地域の「今」を伝え続けます。

2018.11.17

ドキュメンタリー

『ブラックアウト～530万人の2日間～』放送

北海道胆振東部地震では、北海道電力苫東厚真火力発電所が被災し、全道295万世帯が停電する事態となり市民生活が混乱に陥りました。この国内初のエリア全域停電をテーマにドキュメンタリーを制作し、道民は何を必要としたのか、どのように行動したのかを生活者の目線から深掘りしました。番組は、『テレメンタリー2018』として全国のテレビ朝日系列で放送されました。



人工呼吸器や透析が必要な患者を抱えた病院の緊急対応や、SNSで拡散した断水のフェイクニュースなど、電力がおおむね復旧するまでの45時間に起きた出来事と、人々の行動を追いました。

2019.1.23

『イチモニ!』出演者が

あつま国際雪上3本引き大会に参加

2019年1月20日に開催されたウインタースポーツイベント「第12回あつま国際雪上3本引き大会」に、朝の情報番組『イチモニ!』出演者チームが参加しました。大会には復興を応援しようと同じ被災地となったむかわ町や震災ボランティアのチームなど過去最多の58チームが参加しました。『イチモニ!』チームは地元の強豪チームとタッグを組んで参加し、決勝リーグまで進んで大会を盛り上げました。また、大会の様子は『イチモニ!』で放送しました。



大会は見送りも検討されましたが、「こういう時だからこそ元気を取り戻したい」との思いから開催されることになりました。チームメンバーは昼食時の炊き出しを手伝うなど、地元の人たちと触れ合いました。

2019.3.27

「平成30年北海道胆振東部地震 onちゃん募金」を実施

HTBは2018年9月12日から「平成30年北海道胆振東部地震 onちゃん募金」を開設し、朝夕の情報番組『イチモニ!』『イチオン!』（月～金曜16:00-18:00）やデータ放送などを通じ全道に呼びかけました。2019年3月25日までに寄せられた募金152万1,641円は、3月27日に日本赤十字社北海道支部へ寄付しました。



2019.4.10

『イチオン!!』のデイリーニュースで復興・再建の歩みを伝える

夕方方の情報番組『イチオン!!』の特集企画で、困難にも負けずに前を向くむかわ町の被災者の姿を取り上げました。継続して伝えることは、災害報道における地域メディアの大きな役割です。報道特別番組やドキュメンタリーの制作だけでなく、日々のニュースでも被災地のその後を継続して伝えています。



被災直後の厳しい状況の中でも取材に応じていただいた方との信頼関係を大切に、地元局だからこそその息の長い、きめ細やかな取材を今後も続けます。

アナウンス部から

依田英将



むかわ町で新聞販売店とたい焼き店を営んでいる工藤弘さん。自宅兼店舗は全壊しましたが、工藤さんは残った倉庫で一日も休まず避難所や町役場に新聞を配達し、2019年4月にはプレハブ店舗でたい焼き店を再開しました。「ここを新しいまちおこしを話し合う場所に」と語る工藤さんの姿に町の復興が重なりました。本当の日常に戻るまで、その姿を伝え続けます。



特集2

50周年記念事業

50年目のありがとう

北海道が命名150年を迎えた2018年は、HTBにとっても記憶に刻まれる一年でした。1968年11月3日の開局から半世紀の長きにわたりお世話になった豊平区平岸から、札幌のまちづくりの基点となったエリアに竣工した「さっぽろ創世スクエア」に本社を移転。新たなコミュニティとの出会いの中で51年目の歩みをスタートさせた、メモリアルイヤーとなりました。記念事業の基本コンセプトは「未来につながっていく企画」。準備は2015年12月に始まり、全社から360もの提案が集まりました。その中から、地域への感謝と、ますます地域に貢献していくという決意を込めて、5つの企画を実施しました。



ハイタッチ

開局50周年テーマソング「ハイタッチ」は、ドキュメンタリー制作の取材で出会ったHTB社員とアーティストの、友情と信頼から生まれた楽曲です。テーマは、「夢と北海道」。札幌出身のジャズ・アルトサクソフォーンプレイヤーとして世界を舞台に活躍する寺久保エレナさんが作曲し、同じく札幌出身のシンガーソングライターのRihwaさんが歌詞を書き下ろしました。

楽曲制作の過程は朝の情報番組『イチモニ!』で放送したほか、特別番組や振り付けのビデオクリップも制作。『イチモニ!』『イチオシ!!』のテーマ曲として人々に親しまれています。「学校で演奏したい」、「仲間と歌ってみたい」などの声もいただいています。「ハイタッチ」を通じ、これからも北海道にたくさんの「ひろば」が生まれていくことを願っています。



音楽は時代や世代、言葉を超えて共感を生み出します。音楽を聴きながら見ていた情景や感じた気持ちも心の中に残り続けます。「ハイタッチ」が北海道に根差し、人々の大切な記憶の一部となっていくことが私たちの喜びです。



ハイタッチ
(Rihwa ver.)
●YouTubeはこちら



作曲 寺久保エレナ、本間昭光
作詞・歌唱 Rihwa
音楽プロデューサー 本間昭光



ハイタッチ
●YouTubeはこちら



作曲 寺久保エレナ
音楽プロデューサー 本間昭光



イベント

HTBイチオシ!まつり
ステージイベント
寺久保エレナ
ライブステージ

2017年9月3日



イベント

ハイタッチ
(Rihwa ver.)
お披露目ライブ

2018年2月12日



イベント

創世スクエアHTBまつり
ステージイベント

みんなで「ハイタッチ」を踊ろう!
with LIVE DAM STADIUM

2018年10月12日~14日



特別番組

HTB開局50周年記念
イチオシ!モーニングスペシャル
ハイタッチ
~ユメミル、音楽のチカラ~

2018年3月24日 16:30-17:30放送



ハイタッチへの思い

楽曲制作がスタートしたのは2016年夏から。「社内外の多くの人たちに参加してもらって、音楽が広がっていくことを楽しもう」と企画を進めました。うれしいのは、HTB以外で演奏していただく機会が増えたこと。2019年1月には札幌市消防音楽隊結成50周年記念のコンサート、3月には札幌市立新川高校吹奏楽部のコンサートで演奏されました。これからもたくさんの人たちの力で、この曲を大切に育てていきたいと思っています。 **鶴羽 舞子**(編成部、写真左)



2人の道産子アーティストが故郷への思いを込めて、音楽にひたむきに向き合う姿を「イチモニ!」や特別番組で伝えることができました。イベントで出会った方から、「この曲で子どもがハイタッチを覚え、曲が流れると楽しそうに手を合わせてくるんです」というお話も伺いました。この曲は多くの笑顔を生み出し、HTBと視聴者をより良いかたちで結びつけてくれたと感じています。

石沢 綾子(アナウンス部、写真右)

50年目のありがとう

HTB開局50周年記念 イチオシ!モーニングスペシャル 夢の授業 ～かけっことボクたちの約束～

北海道の未来を担う子どもたちの体力向上と、「速く走りたい」と願う子どもたちの夢を応援する1泊2日の授業を夏の栗山町で開催。“カリスマかけっこ先生”こと仁井有介さんが行った授業の様子を番組として放送しました。参加した20名の小学生が一生懸命に頑張る姿を通して、「夢をあきらめない」「最後まで挑戦することが大切」というメッセージを伝えました。

HTB開局50周年記念
イチオシ!モーニングスペシャル
夢の授業
～かけっことボクたちの約束～
2018年7月28日 10:48-11:45放送



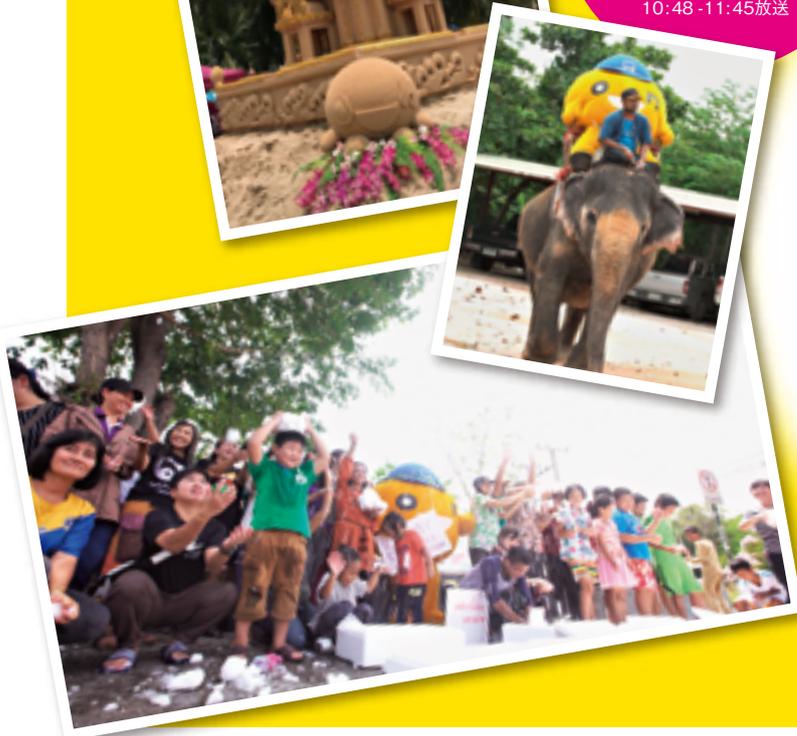
HTB開局50周年 onちゃん アジアへ行く!

2018年12月1日
10:48-11:45放送



開局30周年キャラクターとして生まれたonちゃんは、2018年12月に20周年を迎えました。HTBは2017年4月に北海道大学と連携プログラム実施協定を結んでおり、onちゃんは特別学生として北大の先端的研究や教員・学生の魅力をSNSなどで国内外に発信する役割を担っています。

特別番組では、いまや北海道を代表するキャラクターとなったonちゃんが、キャンパスライフの中で知り合った台湾とタイからの留学生の里帰りに密着。雪をお土産にして旅立ったonちゃんは、各地で多くの人たちと触れ合い、笑顔の輪を広げ、北海道とアジアの絆を深めました。



北海道150年
Tasri **てっし** 名寄まつり × **出張** HTB **イチオシ!** まつり

2014年～2017年まで札幌市で開催した「HTBイチオシ! まつり」は、4年連続で来場者が5万名を超え、大きなにぎわいを生みました。この「HTBイチオシ! まつり」の熱気を地方にも届けたいとの思いから、「てっし名寄まつり」とコラボレーションしました。北海道の名付け親である松浦武四郎と関わりの深い天塩川の河川敷特設会場で、「イチモニ!」の出演者によるトークショーやonちゃんとの撮影会、onちゃんおはようたいそうを行いました。35度近い猛暑の中、訪れてくださった2万名の来場者と触れ合いました。

北海道150年
**てっし名寄まつり×
出張HTBイチオシ!
まつり**
2018年7月29日
名寄市天塩川河川敷特設会場



HTB開局50周年記念ドラマ
チャンネルはそのまま!

全5話
北海道ローカル放送 2019年3月18日～22日
Netflix先行配信 2019年3月11日～
Netflixグローバル配信 2019年3月21日～
(世界190カ国以上)

**チャンネルは
そのまま!** HHTV
北海道
★テレビ

札幌在住の漫画家・佐々木倫子さんの同名人気コミックを、HTB初の連続ドラマとして実写化しました。主人公が勤務する北海道のローカルテレビ局「HHTV北海道★(ホシ)テレビ」のモデルとなった豊平区平岸の旧本社、また新本社をドラマのセットとして使用し撮影。多くの社員もエキストラとして出演しました。

世界最大級のVODプラットフォーム・Netflixと独占配信契約を行い、北海道ローカル放送に先行して配信したほか、グローバル配信も実現しました。コミカルなテイストで、ものづくりにかける夢や情熱、一緒に働く仲間との友情や絆、報道の使命感を描き、「理想のテレビ」の姿を伝えました。



Hello & Touch 2018-2019

2018年度は、たくさんの新しいヒト、モノ、コトと出会った年でした。
変化を前向きにとらえ、未来志向で物事に向き合いながら、
地域メディアとしての役割を自覚し、実行してまいりました。
その活動の一部を、ご紹介します。

札幌の新スポット誕生を共にお祝い

「創世スクエアHTBまつり」開催

HTBが本社を移転した札幌の新たな情報発信拠点「さっぽろ創世スクエア」のお披露目として、「創世スクエアHTBまつり」を行いました。ビルの再開発組合などとの連携の下、創世スクエアと近隣の商業施設「サッポロファクトリー」を会場に、2018年10月12日～14日の3日間、開催しました。

創世スクエア会場では、HTBのスタジオや市民交流プラザ、札幌文化芸術劇場(hitaru)など、あらゆるスペースを活用。施設各所でイベントを行い、番組出演者やHTB社員が総出でおもてなしました。サッポロファクトリー会場では道内市町村グルメブースを企画。道外・海外からの観光客も含め、来場のお客さまに北海道の味を楽しんでいただいたほか、参加した自治体同士がつながる場としても活用いただきました。イベントは、企業市民としてまちの人々との顔が見える関係を大切にする「ひろば」であり、地域を盛り上げる役割を担っていきたいとの思いを、社員一人ひとりが強める機会となっています。

まちのにぎわいを創出

エントランスで連日新社屋オープン記念イベント開催

HTBでは、移転直後の9月19日からエントランスで、エリアの皆様への「引っ越しのごあいさつ」と位置付けたイベントを行いました。イベントは、近隣のビジネスパーソンにも立ち寄ってもらえるようランチタイムに合わせて開催し、10月12日からスタートした「創世スクエアHTBまつり」まで、毎日続けました。

その後も、ヨガ教室やミニコンサートの開催、アナウンス部による東日本大震災を風化させないための活動「今、わたしたちにできること」のイベントなど、不定期でさまざまな催しを行っています。移転後は、イベント担当部署以外の部署のイベント企画・運営が活発化。全社が一丸となり、皆様に笑顔を届けています。



エントランスに、お散歩中の保育園児が遊びに来てくれたこともありました。
後日、HTBから保育園へ、「onちゃんおはなし隊」の訪問をプレゼントしました。

創世スクエア HTBまつり

創世スクエア会場

●イチオン! 生中継



●ステーションメッセージ収録



●hitaruでon披露目 ステージデビュー!



hitaruで特技を表現したいアマチュアを募集。40組以上が音楽やダンスを披露しました。HTB出演者も楽器演奏に挑戦しました。



●onちゃん撮影会



サッポロファクトリー会場

25年の歴史を持つサッポロファクトリーの、1日の最高集客数を塗り替える日も出るなど、予想を超える大盛況となりました。



創世マルシェ

道内市町村の食材や名産品を販売。2019年3月までに、エントランスで4回開催しました。2019年3月9日・10日には北海道胆振東部地震で被害を受けた厚真町など、東胆振・日高地方の5つの町の産品やグッズを販売する被災地支援マルシェを開催しました。



HTB寄席

2019年3月15日、月の家小圓鏡(つきのやこえんきょう)師匠を迎え、エントランス初の有料イベント「HTB寄席」を開催しました。前売り100席が完売し、大盛況となりました。落語好きの大野恵アナウンサーは小圓鏡師匠に稽古をつけていただき、南平亭恵朝(なんびらてい めぐっちょ)の高座名で出演。満席のお客様のあたたかな拍手に支えられ、演目「まんじゅうこわい」を披露しました。



LINE LIVE

2019年1月8日、北海道で活動するアイドル「ハロプロ研修生北海道」をエントランスに迎え、配信番組『きたけん!あけおめパーティー』をHTB公式LINE LIVEチャンネルでライブ配信しました。足を運んだ方にも、会場に来られなかった方にも、出演者とのリアルタイムかつ双方向のコミュニケーションを楽しんでもらいました。



時代の要請に応える

放送、イベントなど多角的な活動でSDGsの普及・推進に貢献

SDGs(エスディージーズ:Sustainable Development Goals 持続可能な開発目標)は、未来に続くよりよい世界をつくるために国連で採択された、2030年までの達成を目指す国際目標です。「経済」「社会」「環境」の3つに大別される17の目標が設定されており、これらが互いに関連していることが大きな特徴といえます。「誰一人取り残さない(no one will be left behind)」という壮大な理念を掲げ、世界中が達成に向けて動く中、HTBもさまざまなパートナーと連携し、SDGsの達成に向けたアクションを起こしています。



社会課題の解決に貢献



地域医療を支える『医TV』の「北海道民健康化プロジェクト」

『医TV』(イーティービー)は、地域貢献型の医療広報番組です。2009年7月に誕生したこの番組は、医療機関の広報をサポートすることで、地域の生活者が適切な医療機関を選択するために必要となる正確な医療情報を提供し続けてきました。2012年からは、医学の進歩で広がった医療の可能性や、高齢化や医療費増加などの現状に対応した医療施策などについて地域社会に発信を行う「医療のチカラプロジェクト」を展開してきました。

2018年度は、新たに「北海道民健康化プロジェクト」をスタートし、このプロジェクトの一環として、医療機器メーカーや自治体、日本医療大学、天使大学と連携した「血圧はかりっこキャンペーン」を実施しました。

未来へのものさし

朝日新聞北海道支社との共同企画です。SDGsを“未来へのものさし”と言い換え、すべての人に北海道の未来を考えてもらいたいとの思いの下、新聞とテレビで2019年1月からシリーズとして発信しています。SDGsへの理解を広めるためのセミナーやトークイベント、講演会なども企画し、その情報は共同で立ち上げたFacebookで発信しています。2019年2月18日には、札幌市、札幌市図書・情報館との共催で、トークイベント「未来へのものさし #SDGs北海道～2030年の世界・日本・北海道・あなた」を開催しました。定員を超える約250名の市民が来場。学生、企業、教育関係、行政などさまざまな方々と共に、SDGsへの理解を深め、サステナブルな社会の在り方について考える機会となりました。



2019年3月で、放送回数は450回を超えました。暮らしに必要な医療情報や、医学の今をわかりやすく伝える番組として、地域に定着しています。



日本医療大学総長
特定非営利活動法人
日本高血圧協会理事長
島本 和明氏

ステークホルダーから

短い時間でわかりやすく医療情報を得ることができる、非常に意義がある番組だと思っています。北海道の地域性をよく考えた医療情報を取り上げていて、耳の痛いことも含め、道民が自分たちの健康をしっかり考えるための情報提供をしています。この取り組みが道民の健康を守る一歩になるものと思っています。

SDGs未来トーク2018



2018年10月14日、「創世スクエアHTBまつり」に合わせ、札幌市、朝日新聞、HTBが連携し「参加しよう!できることからガンバロー!SDGs未来トーク2018」を開催しました。SDGパートナーズの田瀬和夫代表、朝日新聞東京本社の北郷美由紀SDGs担当記者を交えたパネルトークでは、3組の札幌の中高生がSDGs貢献への思い、日頃の活動を報告しました。フォーラムには約200名の市民が参加しました。



HTBオリジナルSDGsシールの活用



札幌市立北光小学校5年生を対象に、札幌市環境局と協力してSDGsの授業を実施しました。「自分たちは何ができるか?」を考えるグループワークでは、HTBマスコットキャラクター・onちゃんとそのファミリーがプリントされたSDGsシールを活用しました。このシールの絵や解説は児童たちのSDGsへの理解を助け、その後のワークでは子どもたちから「シールを家の中で、頑張りたいところに貼ってみるのもいいね」という意見も出ていました。



ENPITSU PROJECT



子ども環境情報紙「エコチル」のSDGs企画に賛同し、「ENPITSU PROJECT」に協力しました。これは、道内で使わなくなった文房具を集め、台風被害で文具が不足しているフィリピンの小学校に札幌市内の小学校教諭が届けるといもので、2019年2月12日～28日までの2週間、HTBエントランスにも文房具回収BOXを設置しました。また、「エコチル」と連携して協賛社を募り、応援スポットCMを制作・放送。収益の一部をプロジェクトに寄付しました。夕方の情報番組「イチオシ!」内でのSDGs企画「未来へのものさし」の放送も後押しとなり、最終的に段ボール224箱分の文具が集まりました。これらは2019年3月22日、フィリピン・キナーターカン島にあるハグダン小学校の子どもたち800名に届けられました。



ステークホルダーから



札幌市環境局環境計画課
推進係長
佐竹 輝洋氏

国連の「持続可能な開発目標(SDGs)」は、世界の目標ですが、国や自治体、企業だけでなく、一人ひとりの取り組みが達成につながるものです。メディアがそのことを視聴者にわかりやすく伝え、行動につなげていくことは大変意義があることです。今後の取り組みも期待しています。

地域の歴史を未来に引き継ぐ

「北海道命名150年プロジェクト」を2018年も継続して展開

北海道命名150年を機に、幅広い世代に、多様な角度から北海道を知ってもらうためのプロジェクトを、朝日新聞と連携して推進しました。プロジェクトは2017年からスタートし、2017年度中には合同特設サイトの構築、道内で起きた150の出来事から「重大ニュース」を選定し、特別番組の制作・放送などを行いました。

2018年4月からは、テーマごとに映像で150年を振り返る特集企画を夕方の情報番組『イチオシ!』で実施。朝日新聞紙面でも同テーマでの連載を始め、これらの情報はすべて特設サイトに集約しました。2018年10月には記念シンポジウムを開催し、12月にはゴールデン帯で1時間の特別番組『へえ!ほお〜!150年 あなたと選ぶ重大ニュース第2弾』を放送。足掛け2年で生まれた数々の企画や番組は、高校・大学の授業などで教材としても使われました。



2018年は、アイヌ民族の歴史、札幌の街の礎、札幌ラーメンの歴史など幅広いテーマで届けました。北海道のメディアとしてできることは何かを考え、協業プロジェクトを進めました。

北海道観光にさらなる元気を

LOVE HOKKAIDOアプリに 観光に役立つ新機能追加

北海道の情報を発信する海外向け番組『LOVE HOKKAIDO』では、番組で紹介した情報が見られる多言語対応アプリを配信しています。このアプリと、デンソーのアプリ「NaviCon」（海外では「NaviBridge」）を連携させ、LOVE HOKKAIDOアプリ内で選択した観光スポットをもとにカーナビで目的地を簡単に設定できるようにしました。この取り組みは、HTBとデンソーが、コネクテッドカー（インターネットに常時接続する機能を搭載した自動車）の時代を見据えて行った共同研究の一環です。外国人観光客のドライブをサポートする新機能が、旅の充実と、北海道観光の活性化につながることを期待しています。

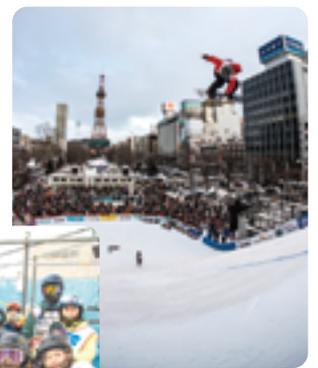


LOVE HOKKAIDOアプリのスポット情報画面で「ここに行く」をタップすると、NaviConアプリが起動。スポットの位置情報が地図上に表示され、カーナビへ位置情報を転送する仕組みです。

ウィンタースポーツの次世代選手を応援

さっぽろ雪まつり会場で 「白い恋人PARK AIR」を運営

「さっぽろ雪まつり」大通西3丁目会場に、高さ20mを超えるジャンプ台を設置。2019年2月4日～11日の8日間で、スノーボードやスキーの大会、中学生以下のジュニア世代によるセッション、スキーモーグル演技などさまざまなプログラムを行い、4,400回を超える演技が披露されました。ジュニア世代の参加者は年々増えており、その実力も高まってきています。都心部に大きなジャンプ台が設置されることは、世界でもあまり例のないことです。エンターテインメントの場であると同時に、若手が良い刺激を受けられる、貴重な選手育成の場にもなっています。



2018年冬季オリンピックでは、スノーボードのファンメイクジャンプが正式種目に初採用されました。小学生の頃からPARK AIRに参加していた選手が日本代表として活躍しました。

先進技術で新しい楽しみを提供

さっぽろ雪まつり期間中に バーチャルリアリティ（VR）体験を提供

2019年2月4日～11日の「さっぽろ雪まつり」の期間中、大通西8丁目雪のHTB広場にて、NTTDコモと共同で「5G実証実験」を実施しました。北海道初となる5G（第5世代移動通信システム）の電波の発射と、世界初の8K3D60fpsによるバーチャルリアリティ（VR）体験を実施して、最新技術と新たな雪まつりの楽しみを提供しました。

ブースには連日多くの方が訪れ、ゴーグルの中で眼前に広がるプロジェクションマッピングや、首を激しく動かしても映像が追いつく高精細なVRへの驚きと感動を味わっていました。5Gは次世代の社会インフラです。来るべきSociety5.0の時代に向け、最新技術を活用した新たなサービスやコンテンツをオープンイノベーション（共創）で提案していきます。



ブースでは2019年にプレ商用開始、2020年に本格商用開始となる5Gについての情報もお伝えしました。「超高速通信・低遅延・同時多接続」という5Gの特徴に、参加者は関心を強めていました。

ステークホルダーの声を聞く場づくり

放送番組審議会の開催

放送番組審議会は、視聴者とHTBを結ぶ場です。審議会は、地域の有識者10名で構成され、男性委員と女性委員が同数、世代は30代1名、40代3名、50代5名、60代1名(平均年齢50.4歳 ※2019年3月31日時点)となっています。番組制作や放送の在り方について広く審議いただいており、委員からの提言は積極的に現場にフィードバックされより良い番組づくりや放送活動に活かされています。また、テレビ朝日系列では他系列にない独自の取り組みとして、年1回、系列24社の番組審議会代表者会議において、統一テーマで議論を行っており、これもHTBの企業活動に活かされています。



2018年度 審議対象番組・テーマ一覧

2018

- 4月 テレメンタリー2018「嘘塗りの骨～アイヌ人骨返還問題の悲痛～」
- 5月 HTBノンフィクション「涙を笑顔に変える場所～ジャンパー伊藤有希の挑戦～」
- 6月 HTBノンフィクション「ごはんだよ。～にじ色こども食堂～」
- 7月 第87回テレビ朝日系列24社放送番組審議会委員代表者会議 統一テーマ
「地上波テレビが生き残るためには～インターネット社会の中で～」

地域からの提言 HTB番組審議会・意見(抜粋)

インターネットやCS放送は自分で見るべき番組を選ばなければならないが、地上テレビ放送はプロが選んで届けてくれる。この点が最大の魅力だからこそ、届けるべきもの、届ける価値があるものを提供する責任もあり「信頼」が重要である／圧倒的なコンテンツ制作力を持っていることが、地上テレビ放送の強み。この優位性はきちんと担保していかなければならない／地域に寄り添い、地域の情報を掘り起こすことも地域メディアに求められる役割。災害時には正確で役に立つ情報を発信する公共的な役割も担っている。その意味で地域に根差す地上テレビ放送の存在意義がさらに高まる時代といえる。

- 9月 HTB開局50周年記念 イチオシ!モーニングスベシヤル「夢の授業～かけっこボクたちの約束～」
- 10月 イチオシ!モーニングスベシヤル「美女と釣り～さかな天国♥積丹編～」
- 11月 「激震～あの日から1カ月～」

2019

- 1月 HTB開局50周年記念「onちゃんアジアへ行く!」
- 2月 テレメンタリー2018「カナリアたちの叫び」
- 3月 「ハナタレナックスEX(特別編)～ニッポンが行きたい北海道ドキドキ!札幌すごろくツアー～」

地域メディアとしての在り方を自問する

BPO放送倫理憲章委員会
札幌意見交換会に出席

2018年11月29日、BPO放送倫理検証委員会の意見交換会が札幌で開催され、委員会から3名、NHKと民放合わせ放送局から51名が出席しました。北海道胆振東部地震にまつわる放送上の諸問題や、番組制作におけるインターネット上の情報利用を主な議題として活発に意見が交わされました。HTBは地震取材の安全管理、電話やSNSなどで寄せられたさまざまなご意見への対応などについて報告しました。各局の報告を共有することで、SNS上のデマ情報に対する向き合い方や停電下での情報の扱いなど、考慮や苦心したことをあらためて確認できました。地域メディアとして災害報道の在り方を考える、またとない機会となりました。

地域の一人としての姿勢を確認

メディア人としての自律を促す
さまざまな施策

メディアの信頼性は、普段からの社員一人ひとりの行動にかかっています。メディアで働くものとしての自覚を持った行動を示し、実行を促すべく、施策を行っています。

コンプライアンスと放送倫理に関する
社内チェック体制の設置

「コンプライアンス委員会」「情報セキュリティ委員会」「放送倫理委員会」を設置し、それぞれのマネジメント体制と規定に則り、定期的に委員会を開催し社内外の事例を共有しています。

小冊子「約束と責任」の配布

企業理念「HTB信条」に基づき、「基本憲章」と「行動基準」からなる「HTB倫理憲章」を定めています。2013年から配布している、倫理憲章などを収めた名刺サイズの携帯用小冊子「約束と責任」は、HTBで働く全スタッフの、日常業務の指針を記載したものです。24時間・365日公人であり、地域の生活者・メディア人でもあるという自覚と振る舞いを求め、「6つの自問」を掲げて人の尊厳や報道機関としての心構えなどを記載。一人ひとりの責任ある行動を促しています。また、イントラネットでも、毎月テーマを決め、法令や社会規範順守の啓発文書を公開し、日常的な意識付けを図っています。

アンケートの実施(内部監査)

2018年度上期内部監査の一環として、「社内の情報伝達」について全社員を対象にアンケートを実施。経営情報の社内伝達のスピードやコミュニケーション方法の違いによって生じる課題を洗い出し、共有することで業務改善に役立てています。



Stakeholder Dialogue

これからの地域メディアとは。 これからの「ひろばづくり」とは。

HTBは、誕生から50年の間、暮らしのインフラとして地上波放送を継続する一方、地域メディアとして、企業市民として、たくさんの方々との「Hello&Touch」を積み重ねてきました。変わりゆく時代の中で、地域メディアに求められる役割も変わりつつあります。私たちの新たな仕事場・創世スクエアで、北海道の未来を担う高校生たちに、テレビやHTBに対する期待・要望を伺いました。

●HTB第2スタジオにて撮影



あなたにとって、 HTBはどんな会社ですか？

寺内 今日は創世スクエアにお越しいただきありがとうございます。社屋の中に入るの、これが初めてですね。

坪井 はい。「創世スクエアHTBまつり」の中で開催されたイベント「SDGs未来トーク2018」に参加した時に、エントランスなど一部エリアには入りましたが、社員の皆さんが働くエリアに入るのは初めてです。

熊田 第2スタジオも見せていただきました。初めて見るものばかりで圧倒されました。テレビ局内に入る機会はなかなかないので、楽しかったです。

寺内 それはよかったです。ところで、皆さんはHTBのことを、どんな会社として見えていますか？

坪井 HTBはオリジナルのSDGsステッカーを作っていますよね。そのステッカーにonちゃんや仲間のキャラクターがたくさん使われていて、とてもかわいいと思います。テレビ局という自分とはかけ離れた世界かなという気がするのですが、HTBは親しみやすいなと感じています。

熊田 私は、小さい頃、『イチオシ!』にVTR出演したことがあるんです。それは特別な思い出として心に残っています。HTBは、ローカルにしっかり目を配って、それを広く発信している会社という印象が強いんです。

寺内 私たちの仕事は、地域の情報を発掘・発信していく仕事ですから、今のお話はとてもうれしいですね。

富谷 SDGs関連のイベントで取材していただいた時に、HTBは頑張っている人を応援し、その活動をしっかりと伝えようとしてくれると感じました。取材対象を「テレビのために」「番組づくりのために」

利用しようとするのではなく、「人」を大事にする姿勢に好感を持ちました。

寺内 ありがとうございます。北海道の生活者の声や活動を手間ひまかけて発掘し、広く届けることは地域メディアの存在意義です。また、地域の皆さんに最も期待されている役割でもあると思います。映像や音声には強い訴求力があり、テレビには強い伝播力があります。地上テレビ放送には、「あまねく伝えることができる」という特性もあります。これらの強みを活かして、これからも地域に密着した情報発信を続けていきます。

あなたが描く未来の北海道。 その実現にHTBは、どのように貢献できますか？

寺内 HTBの企業理念は「夢見る力を応援する広場」です。皆さんはこれからの北海道を担っていく世代ですが、どんな北海道の未来を夢見ているのか、聞かせてもらえますか。

富谷 私は、北海道が今、「東京化」しているように思うんです。新しいものをどんどん取り込む気風は素晴らしいところもあるけれど、北海道には農業をはじめいろんな産業があり、独自の魅力もある。こうした部分は大切に、その上で他の都府県や諸外国とたくさん交流を持っていくようになったら、より魅力的な北海道になるんじゃないかなと思っています。

熊田 北海道には今、多くの外国人観光客が来ています。そうした状況を土台にして、北海道という土地が国を超えて人が集う、いろんなコミュニティーとつながるきっかけを生む場所になっていったらいいなと思っています。テレビが、そのための情報を発信するのはとても大事だと思います。

寺内 なるほど。HTBは海外向け情報番組『LOVE HOKKAIDO』



札幌市立札幌開成
中等教育学校4年生
熊田 芽依さん

ボランティア局に所属し、最近ボランティアやSDGsに関する活動に力を入れて取り組んでいる。特技は3歳から続けているクラシックバレエ。



札幌市立札幌開成
中等教育学校4年生
坪井 若菜さん

書道部で、学校祭では大筆での書道パフォーマンスも披露するほどの腕前。3年生の時に友人たちに声をかけ、SDGsに関する活動をスタート。



札幌市立札幌開成
中等教育学校4年生
富谷 湖雪姫さん

SDGsに関する活動を熱心に行っており、友人たちとさまざまなイベントに参加。学外で演劇活動も行う。格闘技好きで、大の新日本プロレスファン。



北海道テレビ放送
代表取締役社長
寺内 達郎



で、長年にわたり北海道の魅力を発信してきました。これは「HTBのCSR」の一つ目である「本業を通じたひろばづくり」にあたります。今、北海道の総人口は530万人を切りました。少子高齢化の進行に伴

うさまざまな問題も発生しています。こうした状況を打破する上で、北海道を国内外から人々が集う「ひろば」にしていくことは、非常に有効な手段だと私も思います。北海道のブランディングに貢献し、国内外に北海道を売り込み、交流人口を増やすことで北海道を豊かにする。その取り組みを、企業活動として続けてまいりますね。

坪井 北海道は2018年に「SDGs未来都市」に選定されました。私は、北海道が世界的にもSDGs先進地域といわれるようになったらいいなと思っています。ただ、SDGs自体を知らない方もまだまだ多い。どんなに素晴らしい取り組みも、発信しなければ「ない」と同じです。テレビの伝達力はとても大きいので、ぜひ、力を貸してもらえたらと思います。テレビは、字幕や副音声などで、聴覚や視覚に障がいのある方にも情報を届けられますよね。SDGsの理念である「no one will be left behind(誰一人取り残さない)」と通じるところもあるので、テレビとSDGsがつながると、とても素敵なんじゃないかと思っています。



寺内 自分たちの特技を活かして皆さんの夢を応援するという事です。これは「地域とのひろばづくり」であり、「信頼関係を築くひろばづくり」でもあると思います。身近なもの、わかりやすいものとして届けていくことは、物事を浸透させる大きな力になります。SDGsは17のゴールを設定していますが、それに絡めて17の題材でショートドラマやバラエティーなどをつくるとか、17人のSDGsアイドルをプロデュースするなどしたら、興味を持ってくださる人は増えるのかなと思います。楽しい時間を生み出すコンテンツづくりはテレビ局の得意分野ですが、自分たちがつくるだけでなく、ものづくりをしたいと思っている方にこのスタジオを自由な発想で使ってもらおうというのもいいかもしれません。

富谷 楽しそうですね!

寺内 噛み砕いて伝えてだけでなく、日々のニュースやドキュメンタリーで丁寧に伝えることも合わせて行っていくと、より効果的です。HTBは朝日新聞北海道支社との協業で、SDGsの啓発活動を2018年から行っていますが、このようにさまざまな企業や人と連携したりしていくとさらに可能性は広がります。自分たちの伝達技術とものづくりのノウハウを活かし、地域と一緒にみんなの夢を応援してまいります。

**あなたとテレビとの関係を教えてください。
また、テレビというメディアに期待することを教えてください。**

寺内 お話を聞いていて、皆さんが「テレビは大きな影響力を持つメディア」とらえてくださっていることを強く感じました。一方で、皆さんの世代はあまりテレビを見ないと言われてはいますよね。実際のところはどうか。

坪井 テレビを見るのは、朝、学校に行く準備をしている時くらいですね。ニュースを流し見するとか。でも、ニュースもインターネットでチェックすることの方が多いです。

富谷 私は、朝は『イチモニ!』を見ますが、帰宅後は、なんとなくバラエティーを見たりするくらいで、必ず見ると決めている番組はありません。

寺内 皆さんが、積極的に「テレビを見よう」と思うのはどういう時ですか?

熊田 興味や関心を持っている番組が放送される時です。私は、大好きなシリーズもののドラマは、必ずテレビで見ます。ほかの番組は見逃し配信サービスを使ってスマートフォンで見たりしますが、好きなものはリアルタイムでしっかり見たいです。



富谷 身近な人が取り上げられた時も見ます。普段テレビを見ない友人も、私たちの活動を取り上げていただいた時には、テレビを見てくれました。

寺内 内容や出演者が、自分にとって身近だったり、親しみを感じているものだと、興味が湧くのです。



坪井 そうですね。あとは、災害が起きた時です。インターネットだと、フェイクニュースなども流れてくるので、信頼性のある情報を得ようと思うとテレビで情報を確認します。

熊田 北海道内の事故などの情報も、全国ニュースにはならないことが多いのでテレビでチェックします。

寺内 親近感と信頼性。それが、テレビというメディアが地域と共にあり続けるために必要なことなのだと再確認しました。私は、親近感と信頼性を生み出すためのキーワードは「地域密着」だと考えています。そして一番の地域密着とは、「人々が集まる場所、楽しめる場をつくること」だと思います。南平岸時代にも、たくさんの方がわざわざ坂を上って当社へ足を運んでくださいましたが、常に多くの方が行き交う創世スクエアへの移転を好機として、HTBをさらに大きな「ひろば」にしていきたいです。

富谷 ここは本当に多くの方が来ますよね。先日、創世スクエアで演劇のイベントをしたんですが、演劇に興味のない人も思いがけずたくさん来てくれたんです。そこから新しいつながりも生まれて、とても楽しかったのを思い出しました。



寺内 人が出会って、情報が集まるし、広がっていきいますよね。高校生の皆さんにも、HTBに遊びにきてほしいなと思っています。

坪井 テレビ局に遊びにいくという発想がなかったので、びっくりしました。私たちもお邪魔していいんですか？

寺内 もちろん。高校生がここに集まるようになれば、高校生たちとつくる新しいコンテンツも生まれるかもしれませんよ。テレビという枠にとらわれずに、みんながHTBに来たくなる仕掛けをどんどん考えていきますので、気になったものにはぜひ参加してください。

私たちは自らを「ローカルテレビ局」ではなく「地域メディア」と称してきました。それは、「北海道の価値を高めること」こそが私たちの一番の存在意義だからです。テレビは重要な本業ですが、あくまで一つの「出口」に過ぎません。まずは来て、見て、触って、参加していただきたい。たくさんのお会いから生まれる喜びや共感が、テレビの原点です。そこに立ち返っていくことが、本社移転の大きな意義だと思っているのです。



企業理念

〈HTB信条〉

HTBは夢見る力を応援する広場です

私たちは北海道の未来に貢献する「ユメミル、チカラ」です。
発見と感動を発信し みんなの心を応援します。

私たちは日々「今」を伝え続けます。
地域のための情報を発信し みんなで地域をつくります。

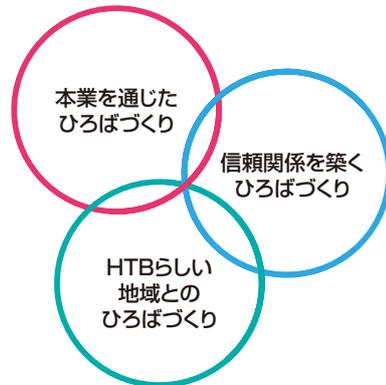
ビジョン

〈HTBビジョン 未来の北海道〉

- 笑顔がつながり 響きあう
- 地球にやさしく 食と自然が生きる先進の大地
- 新しい価値を創造し アジアに際立つHOKKAIDO

HTBのCSR

私たちのCSRは、本業の強みを最大限に活かし、地域に対する責任を果たすことです。生活者や地域との共感、信頼関係を築き、一人一人が日々の仕事を通じて、地域の未来に貢献する「ひろば」をつくります。



私たちは第一に本業を通じて地域の課題に寄り添い、社会的責任を果たします。日々の暮らしに必要な生活インフラとして、地域の「今」を伝えます。新しい発見や感動という価値を生活者と共有し、地域の未来を共につくっていきます。

私たちは日々の仕事の強みを活かして、地域の人の心を育みます。特に未来を担う子どもや若者の夢と意志を積極的に応援します。対話を大切にするこの活動は、私たちも学び、成長を共にする場でもあります。

私たちは地域社会の一員、メディア人の責任として、法令、社会的規範、放送倫理を順守します。そのために私たち一人一人が守るルールやチェック体制をつくり、地域との共感、信頼関係を築いていきます。

2018年4月27日

北星学園大学連携講座「メディアと社会」

「地域メディアとしてのイベントの在り方」と題し、HTBにとってのイベントは“直接的なメディア”であるというお話をさせていただきました。自身の業務がテレビの仕事の中で、どういう役割を果たしているのかを見つめ直す機会にもなりました。



本吉 智彦
プロモーション
事業部

2018年6月8日

北星学園大学連携講座「メディアと社会」

「音育～ことばのチカラを育てる～」をテーマに講義しました。SNSを活用する若い世代だからこそその悩みやトラブルもあり、皆、言葉や対話の必要性を感じてくれました。番組『ごはんだよ。～にじ色こども食堂～』も上映。共に取材した三戸史雄カメラマンか



ら、映像で伝える仕事の魅力も伝えさせていただきました。

森 さやか
アナウンス部兼
ワークライフバランス・
ダイバーシティ推進部

2018年5月11日

千葉県環境保全協議会 公害防止管理者統括者研修

地球温暖化の影響を受け減少を続ける世界中の氷河を追うシリーズ番組を担当したプロデューサーとして「地球温暖化最前線」をテーマに、番組の映像を交えながら千葉と札幌で講演しました。来場した方々からは、「氷河の映像はインパクトがあった」「科学的視点に感心した」と好評を頂きました。



濱中 貴満
報道部

365日、ずーっと



社員

HTBは、地域からの社員派遣のそれは、社外での「ひろばづくり」こそが、新たなこの一年も多くの社員が、地域の皆様と触れ

2018年5月26日

日本BPW連合会 ヤング・スピーチコンテスト全国大会

自分の仕事、そして仕事に対する思いについて、来場者約300名を前にスピーチしました。「思っていたこととの違いなどに戸惑っても、初心を忘れず、素直に頑張ることが大事」と話しました。最優秀賞を頂き、働く女性への「思い悩んでも前向きに考え成長してほしい」というエールになったと感じています。



李 一程
国際メディア事業部

2018年7月29日

第12回清田演劇のつどい連携イベント 水の授業

北海道コカ・コーラボトリングと共に、小学生20名に向けて豊かな水資源を守ることはSDGsへの貢献になると伝えました。この授業は、住民グループのメンバーとしての個人活動がきっかけで生まれたもの。これからも地域の大人たちが連携する姿を、子どもたちに見せていきたいと考えています。



金子 哲俊
CSR広報室兼
ワークライフバランス・
ダイバーシティ推進部

2018年8月27日

りぷるサロン第1回“女性活躍の次のステージへ” 「企業とフェアネス」

ジェンダーにおける「フェアネス(公正・公平)」をキーワードに、ジャーナリストや道内企業の方々と話ず機会に恵まれました。自分にもある「無意識の偏見」にはっとする場面もありました。人の



根源的な欲求であるフェアネスを意識する機会を、暮らしや仕事において、増やしていきたいと感じました。

岡 仁子
CSR広報室兼
ワークライフバランス・
ダイバーシティ推進部

2019年3月9日

平成30年度登別ときめき大学

スポーツ取材や道内各地の一次産業を取材して感じた北海道の魅力についてお話ししました。特に、漁師の皆さんの勤のすごさなど、安心・安全な食を支える人たちの思いや経験を伝えたいと臨みました。参加の皆さんに興味を持って耳を傾けていただき、伝え手としての使命をあらためて感じる経験となりました。



菊地 友弘
アナウンス部

Hello & Touch!

は語る

ご依頼に積極的にお応えしています。

課題の発見や、次の挑戦のきっかけになるからです。

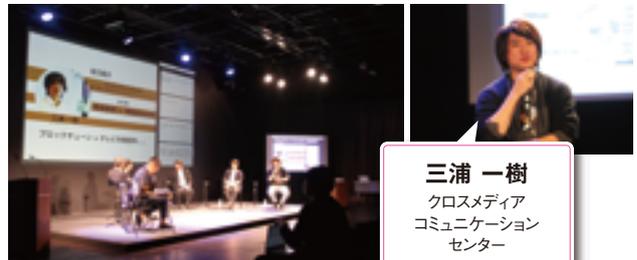
合う機会をいただきました。その一部をご紹介します。

※所属部署は実施当時

2019年3月19日

BLOCKCHAIN FESTIVAL 2019 IN SAPPORO

信頼性の高い新たなデータベース技術であるブロックチェーンについての技術的な議論を公の場で行いました。議論は札幌市民交流プラザ・クリエイティブスタジオからインターネット中継もされました。テレビとブロックチェーンは相性の良い技術だと感じています。テレビの魅力の研究し、HTBから発信していきたいと思えます。



三浦 一樹
クロスメディア
コミュニケーション
センター

2019年1月10日

110番の日 北海道警察厚別警察署 安全・安心まちづくり年頭イベント

シリーズ企画「今そこにある詐欺」と連動し、市民500名を前に厚別警察署の一日署長に就任した北海道日本ハムファイターズの稲葉篤紀SCOと詐欺被害撲滅を呼びかけました。典型的な詐欺の手口を初めて知ったという人もいました。「何度も繰り返し啓発する」ことの大切さをあらためて感じました。



依田 英将
アナウンス部

2019年3月27日

第一交通グループ第2回合同女子会研修

参加者は、乗客を安全に心地よく目的地までお連れすることを仕事としている女性ドライバーの皆さん。日頃、お客様とのコミュニケーションを大切にしているということで、状況に合わせた、気持ちに寄り添う話し方や印象アップのちょっとしたコツなど、自分の失敗談なども交えながら話しました。



大野 恵
アナウンス部

ミンナと、ユメミル

HTBは、夢見る力を応援する広場。

この企業理念を胸に、地域の皆様と手を取り合い、
北海道の明るい未来を生み出す「ひろば」をつくっています。



onちゃんおはなし隊

「onちゃんおはなし隊」は、アナウンス部のCSR活動として2005年から始まった、絵本の読み聞かせ活動です。2018年度は保育園や小中学校、札幌市民交流プラザなどで14回行いました。

2018年11月4日にはむかわ・平取・厚真被災3町合同の「震災復興イベント 鶴川ししゃもまつり」に出張。子どもたちをはじめ、会場に集まった皆様と楽しい時間をともにしました。

また、2019年3月1日には、札幌厚生病院小児病棟でアナウンサー体験も行い、子どもたちと交流しました。「onちゃんおはなし隊」はこの日で169回を数えました。



onちゃんコミュニケーション教室 笑顔のコーチング

「笑顔のコーチング」はNPO法人ハロードリーム実行委員会が全国各地で開催している、コーチングの手法を使って相手の笑顔を引き出すコミュニケーション講座です。2018年9月27日、ファシリテーター資格を取得した佐藤よしつぐ・森さやかアナウンサーが講師となり、千歳市立東小小学校で初の出前授業を実施しました。授業には、小中学生36名と先生・保護者が参加し、「ヒーローインタビュー」や“にらめっこ”ならぬ「えがおっこ」で笑顔の交換を体験しました。



北海道日本ハムファイターズ×HTB×Staylink 就業体験宿泊学習

2018年8月25・26日、子どもたちが野球とテレビを通して「働く」を学ぶ次世代育成プログラム「北海道で『夢』を見よう! ~体験&体感の宿泊学習~」を北海道日本ハムファイターズと合同で実施しました。合宿には小学5・6年生の児童14名が参加。福田太郎アナウンサーによるスポーツ実況や球場スタッフの仕事を体験し、職業の多様さや、仕事は支え合いで成り立っていること、働くことで周囲に喜んでもらうことや、夢を持つことの大切さなどについて、2日間、一緒に考えました。



宿泊先のゲストハウス「Waya」では、観光ガイド作りを体験しました。

北海道のチカラ 今、わたしたちにできること

2012年3月からアナウンス部が中心となり、東日本大震災の復興支援と、防災・減災の大切さを伝えるイベント「北海道のチカラ 今、私たちにできること」を行ってきました。2018年10月からは毎月、防災や医療の専門家などを迎えてトークイベントを本社エントランスで開催してきました。いざというときに自分や家族、大切な人を守る、防災・減災の意識と知識を高めるための活動をこれからも続けていきます。



onちゃんクイズ

朝の情報番組『イチモニ!』では、イラストの変化前・変化後の違いを発見する「onちゃんクイズ」を放送しています。このクイズについて2018年5月、「色弱の家族がおり、色が変わる問題は、違いを識別できなかつたりしています」というご意見をメールでいただきました。『イチモニ!』では、これ以降デザインや形の変化で違いを探すクイズへと内容を変更しました。



「onちゃんクイズ」は夕方の情報番組「イチオン!!」でも放送しています。

とよひら子どもユメひろば

2014年からHTBと札幌市豊平区が協力・連携して行っている地域活動です。地域の大人や企業が講師となり、子どもたちに、多様な仕事があることや、仕事の知識、面白さを伝えています。2018年度は4回実施し、23回を数えました。2018年8月にはHTB日本社を会場に、神田昭一・米津龍一 気象予報士が先生となって開催。参加児童15名はキャスター体験を通して、天気を知ることが防災につながることや、気象予報士の仕事について学びました。



ミンナが集うひろばが新社屋に! 6階のオープンスペース

新社屋6階には、広々としたオープンスペースがあります。社屋の中で最も見晴らしが良く、食事や打ち合わせ以外にも多目的に利用できるスペースです。社内式典、番組ロケ、インタビュー、HTBで働く子育て世代の交流会「Kodom on (こどもん)」などで使われたほか、取引先との懇親会、一般公募のお客様を迎え入れたトークイベントなどが開催されました。さっぽろ創世スクエアという立地を活かし、社内のみならず地域とのさまざまな交流が生まれる「ひろば」にしています。



窓際のベンチ、椅子など随所に「木」を使っているのが特徴。カラフルな椅子がアクセントになっています。こうしたしつらえは、社員の意見を参考に決定しました。



2018年10月25日、国境研究の第一人者・岩下明裕教授を迎え、報道部主催のパネルディスカッション「日口論客が徹底討論」を実施しました。



2018年12月16日、「光るクリスマス・ツリー」を作る工作会を開催。催しを通じ、スタッフが家族ぐるみで絆を深める貴重な機会になっています。



国連大学認定・RCE北海道道央圏協議会 事務局長

有坂 美紀 氏

水産業界紙記者、環境団体職員、スリランカでのNGO活動のほか、東日本大震災での災害支援活動、中南米大陸縦断なども経験。持続可能な開発のためのコーディネーター、フェアトレードタウンさっぽろ戦略会議 事務局長などを務める。2017年から北海道大学院で科学技術コミュニケーションを専攻。

「夢見る力は、どのように身に付けるのか」。報告書を拝読し、最初に頭に浮かんだ問いです。「HTB＝ユメミル、チカラ」という印象がありますが、報告書からも北海道の人々を支え、北海道の魅力を届けたいという思いが伝わってきます。特集1では、地域メディアとしての、迅速に正確な情報を伝えようとする強い意志を、社員の皆さんの言葉から読み取ることができました。災害復興の様子や人々の頑張る姿を報道し続けることも、「地域に寄り添う」メディアとして、次の夢に向かう勇気をサポートしていると感じます。

夢見る力を応援するためには、社員の方々が働きがいを感じていることも大切です。「社員は語る」や「ミンナと、ユメミル」では、地域と対話を行うことで、地域と社員双方にとってHTBが「私たちのテレビ」となり、夢見る力を支え合っているように感じました。HTBの強みである地域との対話を実践、またその活動の社会への報告が、地域のニーズをとらえるためにも必須だと思います。

地域メディアには、「地域の課題を世に出す」という社会インフラとしての役割もあります。夢見る力には、現実を直視し、課題に挑む力も必要だと思います。HTBが実践する地域ジャーナリズムに対する社員の皆さんの思いを、もう少し発信してもよいかもしれません。地域に寄り添い、課題を発見し、人々に課題を投げかける。「共に考える」地域メディアとしてのHTBの取り組みを今後も期待しています。



北海道大学
メディア・コミュニケーション研究院 教授

伊藤 直哉 氏

ルーヴァン・カトリック大学（ベルギー）大学院博士課程修了。研究テーマは国際広報・マーケティング論、観光情報学など。社会・企業との連携を掲げ、北海道CSR研究会の創設・運営を行うほか、企業との連携実績は豊富。日本広報学会理事、観光情報学会理事。

皆さんは、この、地域メディア活動報告書「ユメミル、チカラ応援レポート」と題された冊子をどのように読まれたでしょうか。寺内代表取締役社長と未来を見つめる3人の高校生の対話が、何といても白眉であることは間違いありません。光り輝く若者に「大人」がたじたじになる。期待されたシナリオが期待通りに展開している傑作です。

SDGsの普及・活動経験のある高校生が、「どんなに素晴らしい取り組みも発信しなければならないのと同じ」と痛烈にメディア発信力の重要性を述べれば、寺内社長は「信頼関係」を築けるメディアでありたいと答えます。メディアの本質を社長から引き出した高校生の鮮やかな一本勝ちです。ところで、HTBの考える「信頼関係を築くひろばづくり」は、何によって、どのように実現するのでしょうか。

メディアにおける信頼性は、構築プロセスと活用プロセスに分かれます。信頼性を得れば地域から選ばれる優良メディアとなり、特集1のような災害報道時にはますます信頼度が向上する好循環が生まれます。一方で、構築プロセスに奇跡は存在しません。ステークホルダーとの「地道」で「継続的」な対話やCSR活動が最大のツールとなります。多くの企業事例が示すように、「継続性」の果てに見え隠れする信頼性こそ本物の信頼性です。高校生の問いかけに、「信頼性」と答えた社長に敬意を表しつつ、地域メディアとしての地道な「継続性」とは何かを見つめながら、HTBの今後の活動に期待しています。

上記のご意見は、今後の企業活動および次年度のレポートづくりに反映してまいります。

会社概要



| | |
|-------|---|
| 会社名 | 北海道テレビ放送株式会社(HTB) Hokkaido Television Broadcasting Co., Ltd. |
| 本社所在地 | 〒060-8406 札幌市中央区北1条西1丁目6番地 https://www.htb.co.jp |
| 代表者 | 代表取締役社長 寺内 達郎 |
| 創立 | 1967(昭和42)年12月1日 |
| 放送開始 | 1968(昭和43)年11月3日 |
| 資本金 | 7億5,000万円 |
| 主な株主 | (株)朝日新聞社、(株)テレビ朝日ホールディングス、 ノースパシフィック(株)、北海道建物(株)、東映(株) |
| 従業員数 | 187名(男147名、女40名) ※2019年4月1日現在 |
| 系列 | テレビ朝日系列 |
| 関連会社 | (株)エイチ・テー・ビー・プロモーション、エイチ・テー・ビー映像(株) (株)ディ・キャスト |
| 支社 | 東京支社(東京都中央区)、関西支社(大阪市北区)、旭川支社、 釧路支社、函館支社、帯広支社 |
| 海外駐在員 | ANNロンドン支局 |

編集後記



本レポートは創刊から9年目となりました。創刊以来、変わらないことがあります。大切なステークホルダーである社員を最初の読者と想定することです。私たちの日々の活動を、企業理念とビジョンに照らし合わせてみる。それが、どう地域の課題解決につながっているかを考えてみる。一人ひとりが自らの仕事を企業の存在意義から俯瞰する。レポートがそのきっかけになればと願って編集し発行しています。

HTBが大切にしているCSR活動のひとつが次世代育成です。未来を担う子どもたちの健全な成長と「ユメミル、チカラ」を応援することで、企業市民としての役割を果たしたいと考えています。本レポートでも報告したアナウンサー部のCSR活動「onちゃんおはなし隊」はその代表例です。小さなコミュニティにも積極的に出向きます。その中で、「テレビ局が私たちの集まりに来てくれるなんて思ったこともなかった」という感想をいただいたことがあります。テレビ局が、まだまだ身近な企業ではないということを教えてくれた「声」です。だからこそ、企業理念に照らしながら交流を継続し、報告して対話し続けることに意義があると信じています。ひろばをつくり、自分たちと地域、また、地域と地域をつなぐ“Hello&Touch”を、これからも続けてまいります。

最後まで読み進めていただき、ありがとうございました。ご意見やご感想をぜひお寄せください。皆様からの“Hello&Touch”を心からお待ちしております。

CSR広報室長 岡 仁子

編集チーム

岡田 壮弘(総務局経理部)
四宮 康雅(CSR広報室)
金子 哲俊(CSR広報室)
斎藤 龍(番組審議会事務局兼CSR広報室)
阿部 直美(総務局総務部)
黒澤 圭介(コンテンツ事業室)
本吉 智彦(営業局プロモーション事業部)
濱中 貴満(報道情報局報道部)

編集協力 (株)みんなのことは舎

●ご意見・ご感想

yume-report@htb.co.jp





●社名ロゴマークについて
シンプルな四角は16:9。
デジタルテレビのフレームです。
この空白に、新しい価値をつくる
HTBの先進性や可能性を表現しました。
2006年度グッドデザイン賞を受賞。



色覚の個人差を問わずできるだけ多くの方が
見やすいように製品や情報を提供する考え方を
「カラーユニバーサルデザイン(CUD)」とい
います。このマークは、CUDO(Color Universal
Design Organization)・北海道CUDOにより、
CUDに配慮して作られていると認定された
施設・製品に対して使用が許諾されています。



北海道テレビ放送株式会社

〒060-8406 札幌市中央区北1条西1丁目6番地
<https://www.htb.co.jp>

この冊子に対するお問い合わせ

広報お客様センター

TEL.011-233-6600
yume-report@htb.co.jp

2019年6月発行

